

日本文理大生、リヤカーで地域回る

“移動マルシェ”発進

大分市佐賀関 客の高齢化で刷新

【大分】「僕たちが皆さんの元に出向きます！」。大分市佐賀関の中心部で月1回開かれていた「楽・楽マルシェ」が、日本文理大の学生がリヤカーを引いて地域を回る移動販売型にリニューアルした。イベントの開始から10年目。高齢化がさらに進み、会場まで足を運べなくなった住民が増加。新たな試みで交流の機会を創出する。



商品を積み込んだリヤカーを引き、次の販売場所へ移動する日本文理大の学生＝大分市佐賀関

マルシェはまちづくりを研究する日本文理大工学部建築学科、地元のNPO法人さがのせき・彩彩カフェなどで構成する「佐賀関ローカルデザイン会議」（山田悠二代表）の主催。高齢化や人口減少が進む中心部の活性化を目的に、交番前広場で毎月第4土曜日に開いてきた。地元グループや学生らが手作り野菜、地元の商品、野菜などを販売。100人近くが来場したこともあったが、近年は多くて20人程度という。

リヤカーを引くのは同科の吉村充功教授ゼミの3、4年生ら。初日の9月25日は調理パンや焼き鳥、旬の野菜の他、試験的に日用品や調味料類も積み込んだ。午前10時に秋ノ江ふれあい広場をスタート。関あじ園さは通りを北上し、防波堤までのルートを、途中3カ所の販売場所各15分ほど立ち止まりながら約2時間かけて回った。

10月以降も同じルートをたどる。利用者の声を聞きながら商品を充実させていきたい考えだ。沢井恵介さん(21)＝同大3年＝は「まずは移動マルシェを浸透させたい。お年寄りが外出するきっかけになり、販売場所まで待っていてくれるように頑張りたい」。マルシェは今回で通算111回目。園山拓実さん(21)＝同＝は「先輩たちが続けてきた活動を途絶えさせたくない」と意気込んだ。

吉村教授(45)は「学生にとってマルシェは人口減少が進む地域の人と直接交わる貴重な機会。困り事やニーズなど生活する人や地域の状況を肌で感じ、将来に生かしてほしい」と期待した。(玉井美智子)



「気軽にのぞいてほしい」と呼び掛ける学生たち